



平成 私の
パチンコ史—②

もっと身近なお店に戻れたら

前回より、平成という時代が終わるにあたって「私が見た（感じた）平成のパチンコ史」をまとめています。今回のテーマは、ホール産業についてです。

私がパチンコを打ち始めたのは、昭和60年頃から。当時のホール環境は今とは比べ物にならないほど、タバコの煙がもうもうと立ちこめた怪しい空間でありました。外観はネオン看板がキラつき、従業員はタバコを吸ったり常連さんと喋っていたりして、出玉はお客自身が流すのが当たり前。初めて打つ台でも一切説明書きがないため、隣の見よう見まねで打ったりしたものです。

しかし、平成に入るとサービス業としての立場を確立しようとする企業が現れ、私にとってもちょっとした“事件”が起こります。あれは平成5年頃だったでしょうか、最新式のホールへ打ちに行くと、入り口でいきなり従業員が「こんにちは！」と挨拶して来たのです。当時はパチンコ雑誌に顔を出して記事を書き始めていたため、すぐさま「私のこと知ってるのかな？」と焦ったものの、見るとその人はお客さんに会うごとに挨拶しているではないですか。今では普通ですが、心底驚いたのを覚えています。

そうしたサービスの変化と同時に、平成に入るとホール企業の代替わりも行われたりして、新しい時代に則した店舗作りが加速していきます。折しも、平成5年頃から遊技機においてカード式CR機が普及し、ギャンブル性の増大が大きな利益を生んで、一気に「おしゃれホール」が増えていったように思います。私も週刊誌などで何度かホール特集記事を書いたことがありますが、女性客のための高級ブランド景品が沢山置いてある、というのをはじめ、天井にフレスコ画が描いてあるとか、仕事帰りのお客のためにクリーニング店や託児所を併設などなど、ネタに困らない時代が続きました。それらに伴って明らかに客層も変わり、主婦やOLなど女性客が増えて

来ましたね。

しかしそんなきらびやかな時代は、平成8～9年に起こり始めた世間の「パチンコバッシング」や、内規改正による「CR機連続大当たり5回規制」辺りから徐々に影を落としはじめ、以降は規制と緩和に伴って市場の拡大縮小を繰り返しながら、だんだんファン離れが進んでいってしまったように思います。ホール営業も、かつての新台でドカンと玉を出して少しずつ取り戻していく……というスタイルから、いかに少ないお客さんから短期間で取っていくかという方向にならざるを得ず、疲弊したお客さんが来なくなるという、いわば負のスパイラルに陥ってしまいました。もちろん、ネットやスマホという“ライバル”出現も拍車をかけました。

そんなこんなで、気付けば店舗数も減少の一途をたどり、15年ほど前に比べ半減してしまっています。若い層もあまり見かけなくなり、そこそこ混んでいるのは1円（低貸し）コーナーだけ。省力化で玉箱不要のシステムが普及して従業員も減り、スカスカした淋しい光景も珍しくなくなりました。新台入替で押し合いへし合いが起こったり、座れないギャラリーが山のようにいた、あの時代はもう来ないのでしょうか？ まさに激動の時代にほんろうされた多くのホール企業が、平成の終わりに正念場を迎えています。キレイで礼儀正しい画一的なホールもいいのですが、個人的にはもっと身近な「町のパチンコ屋さん」に回帰する動きがあってもいいのでは？ などと思っています。



平成初期に当り前だったこんな光景も、今ではなかなか見られません

MEMO★RANDOM

じんぼう・みか

法政大学卒業後、文具メーカー勤務を経て業界誌記者となり、1993年独立。取材記事、コラムなど連載。近著「パチンコ年代記」（バジリコ、07年）